

久米島は、人口約8600人、沖縄本島から西へ100kmの東シナ海に位置し、那覇からたつた25分で行ける島です。平成20年にラムサール条約に登録された湿地や島の周囲をサンゴ礁が取り囲み、島全体が県立自然公園に指定されています。基幹産業は農業・漁業、観光業も主要産業の1つとなっています。

さて、久米島町観光協会は、

観光振興でもって地域社会に貢献するとの理念の下、昭和55年に設立され、以来今日まで諸事業を展開し、久米島の島おこしに奮闘してまいりました。設立当初、島内にある航空会社直営のリゾートホテルが、会社挙げて全国へ大キャンペーンを開いた結果、大幅に入域観光客数が伸びました。それ以前は、沖縄本島から時折訪れる小団体と官公庁からの出張者が主でした

が、この大キャンペーン時期から県外観光客が来島してくるようになります。これを機に砂浜が美しいイーフ地区一帯には民宿が立ち並び、若い女性客を中心にはぐくに賑わうようになります。

またけれども、夏場の海水浴を目的としていて、夏が過ぎると閑散とした状況となり、40日

産業と酷評されていました。夏場の「季から脱却を図るべく、観光業に携わる諸先輩は奮起し、筆舌に尽くし難い苦労をされ、

今季の久米島観光を築き上げてきました。

しかし、近年の入域観光客数は、

過去十数年来横ばい状況にあります。この様な状況で久米島でしかできない策はないかと議論している過程で、メンバーの中に食物アレルギーのお子さんを持つ方がおり、調査してみると食物アレルギー児とその家族にとって外食はリスクがあり、まして家族旅行となると楽しめない、あるいは家族旅行を諦めざるを得ない等、外食や旅行に大きな苦労を伴っているのが実情であることを知りました。そこで、当協会内にプロジェクトチームを設置し、委員長の平良博一氏（グリンビューア久米島株代表者）を中心に地域事業者が連携した取組をスタートさせました。これは主に食物アレルギーを持つ子供とその家族にアレルギー対応食を提供し、普段は体験できないシーカヤックや森の散策、洞窟体験、焼き物、染め物体験など多彩な活動を久米島の自然の中で楽しんでもらうとの内容でした。平成19年には経済産業省の委託事業を受け、受け入れ態勢の基盤整備を行ってきました。具体的には、①食物アレルギー対応食を島内の3ホテルにて用意、②食物アレルギーの基礎知識を持つ「久米島コンシェルジュ」の育成、③公立久米島病院等の地域事業者との連携の構築、④体験プログラムのアレンジとなっています。

食物アレルギー対応食は、3つのリゾートホテルで10品目（卵・乳・小麦・そば・落花生・エビ・



地域の目

久米島観光と「食物アレルギー対応旅行」

社団法人 久米島町観光協会事務局長 本永 久

久米島コンシェルジュは、患者家族からの相談を承っており、旅行の問い合わせの段階からコンシェルジュが対応し、除去品目や常用薬といった医学的な情報収集の他、提供するアレルギー対応食の原材料や調理方法、宿泊ホテルの部屋の状況の説明、滞在中の体験プログラムの情報提供などを行います。さらに事業者へはお客様情報の提供や事業者間の調整も行います。

お客様の安心・安全を担うのは、島のほぼ中央にある公立久米島病院で、24時間救急患者の受け入れを行っています。この病院と連携して、アレルギー対応旅行をお申し込みのお客様情報を事前に共有し、緊急時の対応が不安なお客様も安心して久米島に来島できる環境を整備しています。

食物アレルギー対応旅行で来島した家族からは、「諦めていた家族旅行ができた」「除去食作りから解放された」「誤食の不安を忘れてリラックスできた」「除去食のイメージを覆す味付けと盛り付けだった」といった、

平成23年5月、内閣府沖縄総合事務局から「沖縄振興功績者」表彰を受け、現場のモチベーション維持・向上につながりました。今後も持続可能な取組として全国に発信していきたいと考えています。また、この取組をモデルとして食物アレルギーに対応できる観光地が広がり、アレルギー児・家族のQOL(Quality Of Life・生活の質)改善につながることを期待したいと思います。

今後の取組として、久米島が持つ特性と環境をいかした新たな観光地作りへと諸活動を展開し、沖縄観光の振興へ貢献すべく久米島民挙げて努力していく次第です。